

変わりゆく実践研究, 変わりゆく研究者

Changing action research and changing researcher

土倉 英志
Eiji Tsuchikura

法政大学 社会学部
Faculty of Social Sciences, Hosei University
tsuchikura@hosei.ac.jp

概要

本論文では筆者が実践研究に取りくんできた経験のもとで、研究者が実践と研究を兼ねる意義を検討する。実践研究に取りくみはじめると、現場のベターメントとは何かといったことを含め、研究者が自明と思っていた認識がゆさぶられる。当初思い描いていたベターメントは身の丈にあったベターメントへと変化していく。このように、研究のプロセスにおいては、ベターメントに関する認識を含め、さまざまな認識や視点の変化が生じることになる。研究者は、こうした変化を、自身をひとつの媒体として論じることができる。また、生じた変化のもとで、身の丈にあったベターメントを目指し、実行していくことができる。こうした点に、実践研究のひとつの意義がある。

キーワード：実践研究, アクション・リサーチ, ベターメント, 学び

はじめに

本論文では、筆者が実践研究に取りくんできた経験のもとで、研究者が実践研究に取りくむ意義に焦点をあてて検討を行なう。議論に先立ち、本論における実践研究という用語の用いかたを確認しておきたい。それと言うのも、詳細は後述するものの、実践研究の定義は必ずしも明確ではない部分があるためである(小泉, 2007)。

全17巻からなる『心理学研究法』(東京大学出版会)シリーズの13巻にあたる「実践研究」のはしがきにお

いて、高瀬(1975)は実践研究をつぎのように定義している。「心理学者がなんらかの仕方実践の場に参加し、実践的働きかけを行ないつつ同時に実践対象ならびに全体的実践状況の変動を把握し、さらに次の実践を履行するという方法」(p.ii)。この書籍の位置づけによって、定義に「心理学者」という表現が含まれているものの、これは心理学者に限定される必要はないだろう。また、高瀬は研究における立場を「歴史を静観する」立場と「歴史をつくり出す」立場にわけた先行研究(Polak, 1953)を引いたうえで、実践研究を後者の「歴史をつくり出す」立場に明確に位置づける。

なお、実践研究は「実践についての研究」と「実践を通しての研究」に大別して説明されることがある(cf. 秋田・市川, 2001)¹。前者は、すでになされている実践を対象に研究を行うもの、後者は、研究者が実践に参加しながら当の実践を研究対象とするものである。高瀬の定義は、この分類のうち、とくに後者を実践研究と呼ぶものと言えるだろう。本論文でも、高瀬の定義を踏まえて、実践研究を、実践に参加しながら当の実践を研究対象とするものとする²。

実践研究と密接に関連する研究アプローチに、アクション・リサーチがある(cf. Stringer, 2007; 矢守, 2010)。アクション・リサーチには複数の源流があり、それぞれに強調するところが異なる(箕浦, 2009; 冷水・岡本, 2015)。また、実践研究と関連する、認知科学にとって重要なアプローチに、デザイン研究がある(cf. 大島・大島, 2009)。本論文では実践研究とこうしたアプローチとの異同について議論するのは控える。ただし、これらの研究には、実践研究と呼んでも差し支えないものが少なくないと考えている。

表1 2012年度から2016年度の実践研究の概要

年度	内容	対象	主体・授業	場所	備考
2012年度	科学講座	小中学生	2年・演習	公民館	浜松市との連携事業
2013年度	心理学のサイエンスカフェ	一般	2年・演習	協働センター(公民館から改称)、カフェ	一部、浜松市との連携事業
2014年度	心理学のサイエンスカフェ	一般	2年・演習、4年・ゼミ	協働センター、カフェ、コミュニティカフェ	一部、浜松市との連携事業
2015年度	心理学のサイエンスカフェ	一般	2年・演習	協働センター、カフェ、コミュニティカフェ	一部、浜松市との連携事業
2016年度	心理学のサイエンスカフェ、ワークショップ	一般	2年・演習、4年・ゼミ	コミュニティカフェ	同じ場所で8回連続開催

変わりゆく実践研究

筆者はこの数年間、指導するゼミ学生とともに、地域でイベントを実施する実践研究に取り組んできた (e.g. 土倉 (2013; 2014); 土倉ゼミナール (2014; 2015; 2016)). 2012年度から2016年度までの取り組みを表1にまとめた。

一連の研究を遠くからながめれば、いつも地域でイベントを実施しているだけで、代わり映えしないようにみえるかもしれない。ところが、筆者にとっては、そのつど、つねに新たなチャレンジであった。一見するとおなじように見えても、「実践のねらい」「ねらいを達成する方法 (活動内容)」「実践と研究のバランス」、そして、筆者自身の「立ち位置」といった点が異なっているⁱⁱⁱ。おなじような実践研究であっても、そのかたちは変化していく^{iv}。

もちろん、実践を介さない研究においても、研究を続けるなかで、研究手法、仮説、依拠する理論、研究関心といったものは変わっていく。それでは、実践研究における変化は、こうした変化とどこが違うのだろうか。

本論の目的

実践研究では、現場のベターメントに関心が寄せられる。ベターメントとは、改善・改革することを意味する (杉万, 2013)。○○の活性化, △△力の向上, □□意識の改善といった具合に、改善や改革を遠くからながめていると、それによって目指される状態は明確であるように見える。この視点に立てば、実践研究は、“実践研究を始めるにあたり、研究者が持ち合わせていた改善案や理想を、現場において実現すること”ととらえることができる。

ところが、じつのところ、ベターメントとは、このように思い描かれることとは異なっていると言える。では、現場のベターメントとはどのようなことだろうか。本論では、筆者の経験にもとづいて、ベターメントとは何であるのか、という問いにたいするひとつの回答を素描したい。また、この作業を通して、実践研究の意義について検討する。これが本論の目的である。

身の丈にあったベターメントへ

実践研究に取りくむにあたり、たしかに、“このような社会になるとよいのに”とか、“この活動を通じて、

参加してくれる人にこのようなことを考えてもらいたい”といったこと (実践上のねらい) を思い描く。ところが、ある実践のねらいのもとで活動を始めたとしても、往々にして思い描いていたことは変わっていく。あるいは、こう言い換えることもできる。現場に身をおいてみると、「あたりまえ」だと思っていたことが、問い直され、不明瞭になっていく。

具体例を挙げよう。あるとき、私たちは、参加者に“科学リテラシーを身につけてもらいたい”というねらいをもってイベントを企画していた。あえて言語化すれば、これが私たちが当初思い描いていたベターメントにあたり、この記述を読むかぎり、この実践研究におけるベターメントは明確であるように思われる。

しかし、イベントについて具体的に検討を進めていくと、“そもそも科学リテラシーを身につけるとはどのようなことか”といったことがわからなくなった。もちろん「科学リテラシー」の辞書的な意味は理解しており、「科学リテラシーが身につくと何がよいのか」についても説明できるつもりでいた。ところが、ディスカッションを進めていくと、イベントに参加する人たちが生活している日常において「科学リテラシー」と呼ぶことはどのような場面で立ち現れるのか、それがよりベターになるとはどのような変化なのか、それは参加者にとってよいことなのか、といったことが、にわかにはわからなくなっていったのである。

実践研究に取りくんでいると、わかっていたはずのことが不明瞭になっていく経験をするのは稀ではない。そして、わからなくなることは多岐にわたる。“何をベターメントと言っているのか”、“ベターメントの達成はどのように捉えるのか”といったことだけでなく、“現場とはどこを指すのか”、“関係者とは誰なのか”等々、実践研究の前提だったはずのことでさえ、不明瞭になる。こうして実践の展開とともに、いまだ明確に「問い」とは呼べないようなものたちの霧が目の前にかかりだす。

そして、こうした問い (のようなもの) にたいする回答は、往々にして一意に決まらない。霧のかかったなかで、さまざまなアクターとかわり、リソースの制約に直面し、差し迫る期限にプレッシャーを感じながら、自らが拠って立つ立場や理想もまた問いなおされていく。筆者の場合、こうしたプロセスを通じて、先に示したように、研究がかたちを変えていったと言える。

こうしたプロセスのなかで、思い描いていたベター

メントは、“身の丈にあったベターメント”へと姿を変えていく^v。その姿は言うなれば、現実に即した、あるいは、地に足のついた改善である。

どうして研究者が実践を行うのか—変わりゆく研究者の重要性

「どうして研究者が実践をも行う必要があるのか？」
「実践は現場の人に任せて、研究者はデータ収集に専念すればよい。」実践研究にたいしてはそんな声も聞こえてくる。たしかに実践を行ない、かつ、その実践に関するデータを収集し分析し論文を執筆するのは骨が折れる。先のような声にたいしては、いくつかの回答があるだろう (e.g. 清水, 2007; 下山, 2008)。ここでは筆者が考えるひとつの回答を述べたい。極めて素朴な表現に聞こえるかもしれないが、実践に取りくむことで見えることが研究論文に活かせる、というものである。この回答について、ライフストーリー研究者の西倉 (2015) が述べていることを補助線に説明したい。

ライフストーリー研究では、なんらかの当事者の人生についてインタビューを行ない、その語りを分析する。その過程で、研究者は、これまでにもっていた認識や視点の変化を経験するにいたる。そして、こうした変化の末に導かれた結論を提示するにあたっては、読者にその認識・視点の変化を迫体験してもらおう工夫をする。それは、読者が、研究者が研究に取り組むまへにもっていた認識を持ち合わせているからであり、読者の認識をゆさぶるには、自らの変化を活用するのが有益であると考えられるからである。

新たな見えを媒介する媒体としての研究者

先に述べたとおり、西倉がライフストーリー研究について述べているのと同様のことが、実践研究のプロセスにおいても生じる。実践研究を進めていくなかで、問い (の様なもの) に導かれて、自らの立場や理想は問い直され、変わっていく。実践に取り組んでいる研究者は自らが変化し、それによっていままでとは異なる視点で現場をとらえたり、アプローチしたりしていることに気づくことになる。

そして、実践研究の過程でひとまずたどりついた地点は、研究をはじめのまへの自分が、そして、読者の多くが「問題・課題」として、また、その「解決」として思い描いていることとは異なるみえをもたらすだろう。このように、実践研究者は、実践研究を通じて

変容を遂げる。それは、対象の認識の変容であり、自身のものとのとらえ方の変容でもある。たどりついた地点からは、“当初はこう思っていたけれど、じつのところ、それは、どのような問題であるのか”を説明できるようになる。そのとき、研究者は自らがそれを説明する媒体となる。

実践研究の特異性

実践研究がもちうるこうした意義は、ほかの研究アプローチではみられないのだろうか。すでに述べたとおり、他の研究アプローチ、たとえば、実験研究でも、研究を続けるプロセスでこうした変容は起こるだろう。ただし、こうした変容の結果が研究に活かされることはあっても、この変容自体が主題になることは想定しがたい (e.g. Reicher & Haslam, 2012)。

また、本論の議論が重要な手がかりを得たライフストーリー研究は、主として「すでに生きられた」ことを研究対象とする。これにたいして、実践研究は実践のなかで行なわれる。それはまさに「生きている」。そのため、研究の過程で生じた研究者の認識の変化は、善かれ悪しかれ実践に影響を及ぼすことになる。この点が、ライフストーリー研究と実践研究の違いと言えるだろう。この違いは、実践研究らしい挑戦的な部分をもたらすものであり、かつ、研究者に注意を求めるものでもある。

おわりに

本論では、実践研究においてベターメントとは何であるのか、という問いにたいするひとつの回答を素描し、研究者が実践と研究を兼ねる意義について検討してきた。当初思い描いていたベターメントは、実践のなかで身の丈にあったベターメントへと姿を変える。これにとどまらず、実践研究のプロセスでは、研究者に、認識や視点の変化が生じる。自らに生じた変化をひとつの媒体として、現象の新しい見方を提示しうること、また、生じた変化にもとづいて身の丈にあったベターメントを目指し、実際に実行しつづける点に、結論ありきではない、実践研究のひとつの意義がある^{vi}と考える。

文献

秋田喜代美・市川伸一 (2001). 教育・発達における実践研究.
南風原朝和・市川伸一・下山晴彦(編) 『心理学研究法入

- 門一調査・実験から実践まで』。東京大学出版会。
- 小泉潤二 (2007). 「実践的研究」—概念と意味. 小泉潤二・清水宏吉(編)『実践的研究のすすめ—人間科学のリアリティ』。有斐閣。
- Lewin, K. (1946). Action research and minority problems. *Journal of Social Issues*, 2, 34-46. (末永俊郎(訳)『社会的葛藤の解決』。ちとせプレス。収録)
- 箕浦康子(編) (2009). 『フィールドワークの技法と実際 II 分析・解釈』。ミネルヴァ書房。
- 西倉実季 (2015). なぜ「語り方」を記述するのか. 桜井厚・石川良子(編)『ライフストーリー研究に何が出来るか—対話的構築主義の批判的継承』。新曜社。
- 大島純・大島律子 (2009). エビデンスに基づいた教育—認知科学・学習科学からの展望, 16(3), 『認知科学』, 390-414.
- Polak, P. (1953). Existenz und Liebe, *Jb. Psychol. Psychother.*, 1, 355-364. (高瀬(1975)の引用による)
- Reed, E. S. (1996). *Encountering the world: Toward an ecological psychology*. New York: Oxford University Press. (細田直哉訳 (2000). 『アフォードランスの心理学—生態心理学への道』。新曜社)
- Reicher, S. & Haslam, A. (2012). Obedience: Revisiting Milgram's shock experiments. Smith, J. R. & Haslam, S. A.(Eds.) *Social Psychology: Revisiting the classic studies*. London: Sage. (三浦麻子訳 (2017). 服従—ミルグラムの衝撃的な実験—再入門. 樋口匡貴・藤島喜嗣(監訳). 『社会心理学—再入門』。新曜社.)
- 冷水裕・岡本憲之 (2015). 高齢社会のコミュニティにおけるアクションリサーチとは何か. *JST 社会技術研究開発センター・秋山弘子(編)『高齢社会のアクションリサーチ—新たなコミュニティ創りをめざして』*. 東京大学出版会。
- 清水宏吉 (2007). 研究を進める. 小泉潤二・清水宏吉(編)『実践的研究のすすめ—人間科学のリアリティ』。有斐閣。
- 下山晴彦 (2008). 何のために研究をするのか—研究の目的と方法. 下山晴彦・能智正博(編)『心理学の実践的研究法を学ぶ』。新曜社。
- 杉万俊夫 (2017). 『グループ・ダイナミクス入門—組織と地域を変える実践学』。世界思想社。
- Stringer, E. T. (2007). *Action research 3rd Edition*, Thousand Oaks, CA: Sage. (目黒輝美・磯部卓三監訳 (2012). 『アクション・リサーチ』。フィリア。
- 高瀬常男 (1975). はしがき. 続有恒・高瀬常男(編)『心理学研究法 13 実践研究』。東京大学出版会。
- 土倉英志 (2013). 科学講座の創作プロセスの検討—公民館講座の報告, 『浜松学院大学教職センター紀要』, (2), 43-63.
- 土倉英志 (2014). サイエンスカフェの創作プロセスの検討—2013 年度のゼミナールの報告, 『浜松学院大学教職センター紀要』, (3), 31-54.
- 土倉英志 (2017). 『創作プロセスと創作におけるプランの役割のモデル構築—相互行為論にもとづく集団創作活動のフィールド研究』。首都大学東京博士学位論文。
- 土倉ゼミナール (2014). 学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究. 平成 25 年度ゼミ生地域貢献推進事業成果報告書 (大学ネットワーク静岡), 31-35.
- 土倉ゼミナール (2015). ワークショップ型学習における「学びのきっかけ」の探索的検討—学生によるサイエンスカフェの企画・実践を中心とする研究, 平成 26 年度ゼミ生地域貢献推進事業成果報告書 (一般社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム), 81-85.
- 土倉ゼミナール (2016). 新たなサイエンスカフェの企画に向けた検討と提案—今年度の問題点から人びとの交流の促進を模索する—(2015 年度土倉ゼミナール活動報告書), 1-8. (未公開; 研究室のブログに掲載: <http://tshuilab.hatenablog.com/>)
- ヴィゴツキー, L. S. 柴田義松訳 (2001). 『新訳版 思考と言語』。新読書社。
- 矢守克也 (2010). 『アクションリサーチ—実践する人間科学』。新曜社。
-
- i 下山 (2008) は, 同様の分類を「実践に関する研究」と「実践を通しての研究」と呼び分けている。
- ii “実践に参加しながら”という場合の「参加のしかた」にもヴァリエーションがある。たとえば, 実践を展開しているチームに研究者がメンバーの一人として加わっている場合もあれば, 研究者が実践をリードしている場合もある。また, 「実践についての研究」と「実践を通しての研究」という二分類は一見すると理解しやすい。しかし, たとえば, 研究者が複数でチームを組んで「実践を通しての研究」に取りくむ場合, 主として「実践」を展開する者, 「研究」を展開するものと分業に近いことがなされることも想定される。この場合, 研究者が実践者と組んで「実践についての研究」を実施するのと何が異なるのかは詳細に検討する価値がある。さらに, ある「実践についての研究」が, いったいどのような条件を満たすと「実践を通しての研究」になるのかを問うてみると, 回答するのはなかなか難しい。あるいは, 「実践を通しての研究」だと思っていたものが, 結果的に「実践についての研究」にしか見えない, といったこともあるだろう。こうした点を考えると, この分類が有効に機能しない領域が存在していることにも注意がいる。
- iii 大学のゼミ等で実践研究に取りくむ場合, 教授・学習実践, とのバランスも検討される。
- iv これらの側面が年度によって異なっているだけでなく, 同一年度内でも実践研究を展開するプロセスでさまざまな変化が生じた (e.g. 土倉 (2017, 補章))。
- v こうした変化のプロセスを, ヴィゴツキー (2001) の生活的概念と科学的概念の考えにもとづいて整理することもできるだろう。また, 「充たされざる意味」(Reed, 1996) の観点からとらえることもできる。こうした視点を採用する場合, 本論で述べた変化は「学習」として論じられることになるだろう。しかし, 現時点では筆者はそのように位置づけることが適当なのか, 判断しかねている。これらの論点は別稿に譲らざるを得ない。
- vi さいごに, 本論文の冒頭で参照した高瀬 (1975) の言葉を引いておきたい。高瀬はつぎのように述べている。「なかば好奇の心となかば不審の念をもって, この書物の表題をご覧の方も少なくはないかもしれない。事実, “実践研究”とはある意味で新しい造語のたぐいであり, 名称, 内容ともに今日まだ人口に膾炙していない。」(p. i) この記述がなされてから 40 年以上が経った。この間, 実践研究という論文種別を採用する学術誌が本邦にも現れた。実践研究の位置づけは変わったと言えるだろうか。筆者の杞憂に過ぎないかもしれないが, 40 年前とおなじように, なかば好奇の心となかば不審の念をもって, 本論文に目をおす方も少なくはないのではないかと。かつてクルト・レヴィンはつぎのように述べた。「書物以外のものを生み出さない研究は満足なものとはいえないであろう。」そしてこう続ける。「そうはいってもここに必要とされる研究が何らかの点で社会事象の分野の純粋科学に要求されるものより科学性が少なく, また「低級」なものであるというのではけっしてない」(Lewin, 1946, p. 35)。実践研究という研究手法はいまも/いまだからこそ検討される余地が大いにある。